

# 地質図はこうしてできる

## アルプスにいとむ調査マンの苦心

戦後産業の復興，総合開発計画の立案，電源地帯の開発などのため，国土の地質調査が新たな構想のもとに企図され，いまや各府県が管内の地質図の整備に狂奔している現状であるが，地質図はこれらの建設事業には，なくてはならぬ大切なものであつて，その調査結果はまたしばしば学問的な発見を生み，新しい考え方の基礎も開いている。

しかし一方そのためには調査マンは言語に絶する苦痛や，困難と斗い，死の一步手前を彷徨することも珍らしくはない。

本土の屋根北アルプスの地質調査をおこなつたH技官にその苦心談を尋ねてみた。

その日6名からなる地質調査隊の一行は根拠地を“剣御前”の小屋から二股のキャンプに進めていた。1隊は各人40キロ余の調査用具や食糧を背負つて設営隊となり，他の1隊3名は調査隊として剣岳から二股への調査に向つた。

一般の登山家ならピッケル・アイゼン・ザイル……などの登山に必要な7つ道具を持つていくが，地質調査マンはハンマー・クリノメーター・地形図・ルーペ・ノート・各種鉛筆が7つ道具で，1歩1歩岩石の面相を確かめて行かなければならず，頂上まで登り切れば目的を達するのではなく，地質を調査することが目的で，登ることはその手段にすぎない。

捕獲岩の非常に多い花崗岩の岩山を，「カニのよこばい」などの難所ごしに剣の頂上にたどりついたが，剣沢の谷尻附近の花崗岩と谷頭の花崗岩とは別の時代のものではないかとの疑問が生じ，ふたたびこれを確かめるため長次郎の雪溪を下る。

背中のリュックサックは採集した岩石の標本でずつしりと重く，夕陽が長く影をひく中を，ハンマーを片手に下降の第1歩を踏み出した。その瞬間，同行のR君の足場がぐずれて転倒，“アツ”という声をあとに加速度



剣岳の岩壁にいとむ

的にすべり落ちて行く。幸なことに遙か下方のクレバスが，R君の身体を止めてくれたのでホツとしたが，足を負傷した同君を助けながら私達はさらに雪溪の縁沿いに，花崗岩の露頭を追つて行かなければならなかつた。

途中完全装備のS大山岳部の一行に

会い，ハンマー1本をたよりに下つてゆくわれわれに，親切にも頂上へ戻るよう警告を発してくれたが，こちらは仰せに従つては花崗岩の境界が行方不明になってしまうので，初志貫徹，あくまで強引に下つてゆく。

長次郎の雪溪は毎年のように犠牲者がでている雪溪で，完全装備に程遠い調査マンがいかに苦勞し，身の危険もかえりみず困難な仕事をしているかが，この件によつてもよくわかるのである。

花崗岩と花崗岩との境界がどうあろうとも，断層が少々ずれていようとも，直接一國の産業や経済に影響を與えないだろう。しかしすべての開発計画の基礎となる地質図は，このようにして求められた無数のデータの集積であり，その一つ一つが明確でなかつたとしたら，隧道の選定をあやまり，ダム建設に余計な勞力を要し，鉱山の開発を仕損うなどの事態が生まれるので，地質調査は，常にその各々のデータの精度を高めるためにこそ，生命がけで行われているのである。

(地質部)